

石田：お医者さんが玄関でてくときにね「まあ二日ばかりのことだから」って。自宅で看取っていた主人がなくなったのは、その日の夜だった。

本原：私も父を家で看取って。だんだんとね...「こんなに綺麗な顔だったっけ」って。

石田：私は、主人が苦しまなかっただけでね。感謝しとる。ホスピスなんかいれると、自分じゃわからんことが多なる。そうすると、もう悔いが残るよな。だけど、自分がそばで見とれると...。それは、全然違う。

本原：そう、自分の目でね。だんだんとかう...そうなんだよ...。

石田：だから、「ありがとう」も言えなし...、というのが一番感謝だね。まあ、何がいかわからんけどな。

本原：お医者さんが、耳は最後まで聞こえるよって。だから、私は父が好きだった民謡をずっとそばで歌っていたな...。家で看取ることはいいことなんじゃないですかね。

石田：今は施設とか病院で亡くなる方が多くて、家で看取る方が珍しいぐらいだそうですよ。でも、親や旦那さんを自分の家で面倒を見るのは不思議じゃないじゃんって。むしろ、そうやって最後を見せないから、若い人も生と死がわからなくなるんじゃないかな。お父さんが亡くなるときな、「救急車を呼んで欲しいなら私の手を握って」と手を添えたのな。お父さんは、死ぬ時は家でと言っていたからな、何にも握り返してこなかった。でも「寿弥（息子）に会いたい？」って聞いたら、すごい精一杯で、私の手を握ったんですよね。「ああこれなんだなあ」と。言葉に出せなくても、手で握ってと言ったら握ってくれる。これが今忘れられているんじゃないかなあと思うんです。

本原：うんうん... (涙)

石田：最近、生と死っていうのに考えさせられるっていうのかな。自分の死に様をどうあるべきか。どうなるんだろう？どうしたいんだろう？って、すっごく考えちゃう。また相談乗ってな (笑)

一食後に台所を片付けながら一

石田：今日も楽しかったね〜。自分でも、思いがけんようなことをしゃべったなあ。

古橋：ふふふ、石田さん、これは本になるでね〜

石田：いやいやいや (笑)

本原：ここ載しちゃいかんってところは言ってね。

石田：「そこカット！」てか (笑)

本原：そうそう「そこカット〜！」 (笑)

石田：まあだけど、死はいつでも誰でも来るんだけどさ。考える時ってのがあるんだよな。

本原：イギリスでね。It's a nice day to die! って言うんだよ。今日は死ぬのにいい日だって。つまり、いつ死んでもいいよって生きてこって話なんだけどね。nice day to die っていうのを、うちのお母さんに教えたら、なんか頼むと It's a nice day to die! ってあんたが言ったじゃん。私は今日映画見に行きたいから、それはできないって (笑)

石田：ははは (笑)

本原：用事が頼めなくなった。

石田：すごいねその言葉。そこでパシって決まるがね。

